

海外短信



尹 基老*

東アジア首脳文化会談への提言

I . はしがき

「日韓交流祭り2010年 in Seoul」

去年の暮れ、韓国に留学中の日本人数人を連れてソウル市内の歴史文化遺跡を見学途中、ソウル市庁の前の広場で日本の伝統音楽・歌謡が拡声器を通じて聞こえてきた。驚いて行ってみると、数千人の人々が集まって日本文化に関するイベントを鑑賞していたのである。そこでは、日本の歌手が歌を歌ったり、日本の様々な舞踊や祭りが披露されていた。宮崎県の師走祭り、岡山の唐子祭り、秋田の竿灯祭り、青森のねぶた祭りなどで、そのハイライトは「よさこいソーラン節」と「韓国のアリラン」を融合させた踊りが市民の喝采を浴びていた。日本の女性が下駄を履いて踊っている姿がたいへんきれいで印象的であった。さらに、焼き鳥などの屋台も人気を集めていた。祭りの期間に東京の六本木ヒルズの広場でも、韓国の祭りが催されていることを知った。このように、日本と韓国は1つになっているのである。

このような日韓両国の文化交流は今日になって成し遂げられたものではなく、古代から積み重ねられてきたものである。しかし、両国の文化交流はまだ満足のものではない。この劣論は、古代からの両国の文化交流をかえり

みながら、今後より一層文化交流を盛んに行うための試案を提案するものである。

II . 歴史から見る日韓の文化交流

朝鮮半島から日本列島への人的交流が紀元前200年から一早く行われ、大陸の文化が日本に伝わってきた。特に、朝鮮半島の政治・軍事情勢が緊張した4世紀から7世紀の間に集団的に移住が行われ、同時に文化が流入したのである。百済の王仁により文化の要である文字が、漢字・仏教・儒教の経典などから伝わってきたのは周知の事実である。その中には中国の古典である「論語」、「礼記」、「考経」なども含まれていた。また、百済から伝えられたという廣隆寺の半跏思惟像は日本の最高の国宝である。これが日本の文化の礎になったことは言うまでもない。

2001年12月23日、今上天皇は韓国とのゆかりについて言及したことがある。「私自身としては、桓武天皇の生母が百済の武寧王の子孫であると続日本書紀に記されていることに、韓国とのゆかりを感じています。」と述べた一方、「残念なことに韓国との交流はこのような交流ばかりではありませんでした。このことを私たちは忘れてはならない。」とも語っていた。さらに、

* 県立シーボルト大学名誉教授、長崎県立大学リエゾンオフィサー

「正確に知ることに努め、個人個人としてお互いの立場を理解していくことが大切。両国民の間の信頼感が深まることを願っております。」とも語った。これは、韓国と日本が東アジアの同じ地域で文明を共有してきたという歴史的意味を強調したものであろう。また、「残念なことに韓国との交流はこのような交流ばかりではありませんでした。」という天皇のお言葉は、豊臣秀吉の朝鮮侵略などを示したものであろう。侵略中に朝鮮の著名な学者・文化人・技術者などを捕らえて日本の文化発展に貢献させた例は多数ある。朝鮮の儒学者“姜沆”は、日本での捕虜生活中藤原惺窩と赤松広通と出会い、四書五経を和訳し寺子などで教え、江戸の学問発展に貢献した例であらう。また、朝鮮から200ないし500人に及び朝鮮通信使が13回に及び往来し文化を伝えたことは、江戸時代の文化が花開いたということに違いない。日本の近世で広く常用された「木綿織物」を見ても、モンゴルから綿の種子を持って来て栽培した朝鮮が日本に伝え、それが当時の需要産業となり18世紀になると日本農家の副業となって普及した。ついに、近代の織物業の発展のもとを開いたのである。

Ⅲ．日本における韓流ブーム

最近になり日韓両国首脳の間で文化交流の合意がなされた。金泳三大統領は1993年「韓日フォーラム」、96年「韓日歴史フォーラム」、97年「韓日青少年ネットワーク」および「2002年ワールドカップ共同開催」などを、金大中大統領は98年「共同声明」の「行動計画」における青少年交流の強化、日本大衆文化の解禁に合意し、今日の韓流ブームを起こしたのは記憶に新しい。

韓国の日本大衆文化開放により、日本内には空前の韓流ブームが巻き起こった。韓国のドラマ「冬のソナタ」や「チャングムの誓い」は、日本にあらゆる面で大きな影響を与えた。植民地時代の差別感情から抜け出し親韓ファンが急増、ハングル講座の普及、韓国の学界が設立されるなど、韓流ブームが強く巻き起こった。筆者が日本に滞在し始めた70年代は、1年に1万人の人的交流が行われていたが、現在は1日に1万人以上の交流が行われている。両国の歴史上、最も友好的な蜜月時代が到来したのである。これはまさに、文化交流の努力の賜物であらう。

文化交流は、安全保障の面でも大きく寄与するということである。アメリカのハーバード大学、ナイ教授が大衆文化を重要視するソフトパワー論を喝破したのは、文化が存在することで政治・経済・国際関係をも存在するということであらう。歴史的には朝鮮が日本に朝鮮通信使を派遣したのも、明・清の脅威に備え日本との平和を維持するためであり、金大中大統領が対北朝鮮太陽政策を行う前に小渕首相と「21世紀韓日パートナーシップ」を宣言したことを吟味すべきであらう。

Ⅳ．日・英・仏の文化首脳会談

1998年1月、英国のブレオ首相は来日し「英国祝祭98」を催し、1年間全国を巡回するテト美術館、ロンドン交響楽団公演、大英博物館展、英国競馬競技、英日ラグビー対抗戦など200件の催しが最終的には785件にまで増加したことがある。同年4月、シラク仏大統領も来日し「日本におけるフランスの都市の文化祝祭開幕式」を行い、1年間で600件のイベントを催した。「自由の女神像」を東京に移し、日本人の関心を集

めたこともあった。このように、日・英・仏首脳が参席した文化交流の催しは、国際関係における文化の比重が大きいことを表している。ひいて、日本は英・仏を基盤にして、EUにまでも交流を拡大させたのである。

V . 終わり

「東アジアの文化首脳会談への提言」

東北・関東震災にあたって、韓国の全国民と“反日運動の団体”までもが日本の被災者のために心からの慰労と支援、募金運動のキャンペーンを先頭に立ち積極的に活動を行うまでに至ったのは、文化交流の実りではないだろうか。

日韓両国は、歴史的にも地理的にも密接な関係がある。だからこそ、友好関係だけでなく緊張関係も高まってしまうことがありうるのだ。両国は政治・経済中心から文化面を含む均衡のある文化交流が必要であろう。日韓両国を中心に、中国を含めた首脳が共に集まり、未来志向的な文化首脳会談を開くことをあえて提言する。

参考文献

1. 『冬のソナタから考える』高野悦子・山登義明 岩波ブックレット
2. 『朝鮮 風土、民族、伝統』中村栄孝 吉川弘文館
3. 『日式還流』毛利嘉孝 セリカ書房
4. 『日本文化交流小史』上垣外憲一 中公新書
5. 『日本文化と朝鮮』李進熙 NHK ブックス
6. 『文化交流の時代』榎泰邦 丸善ブックス
7. 『近代日本と朝鮮』中塚明 三省堂
8. 『朝日新聞』など